

エピソード

渡辺プロの俊敏、多彩、かつ不屈の歴史を支えてきたバックボーンは、どこにあるのだろうか。それを考えたときに行き着くのが、「社是」と「晋五訓」である。ともに晋が一九七〇（昭和四五）年に、会社の経営理念と社員の行動規範として定めたものだ。

社是

われらは

現代ショー・ビジネスの本質に挑戦し
世界大衆文化の発展を期す

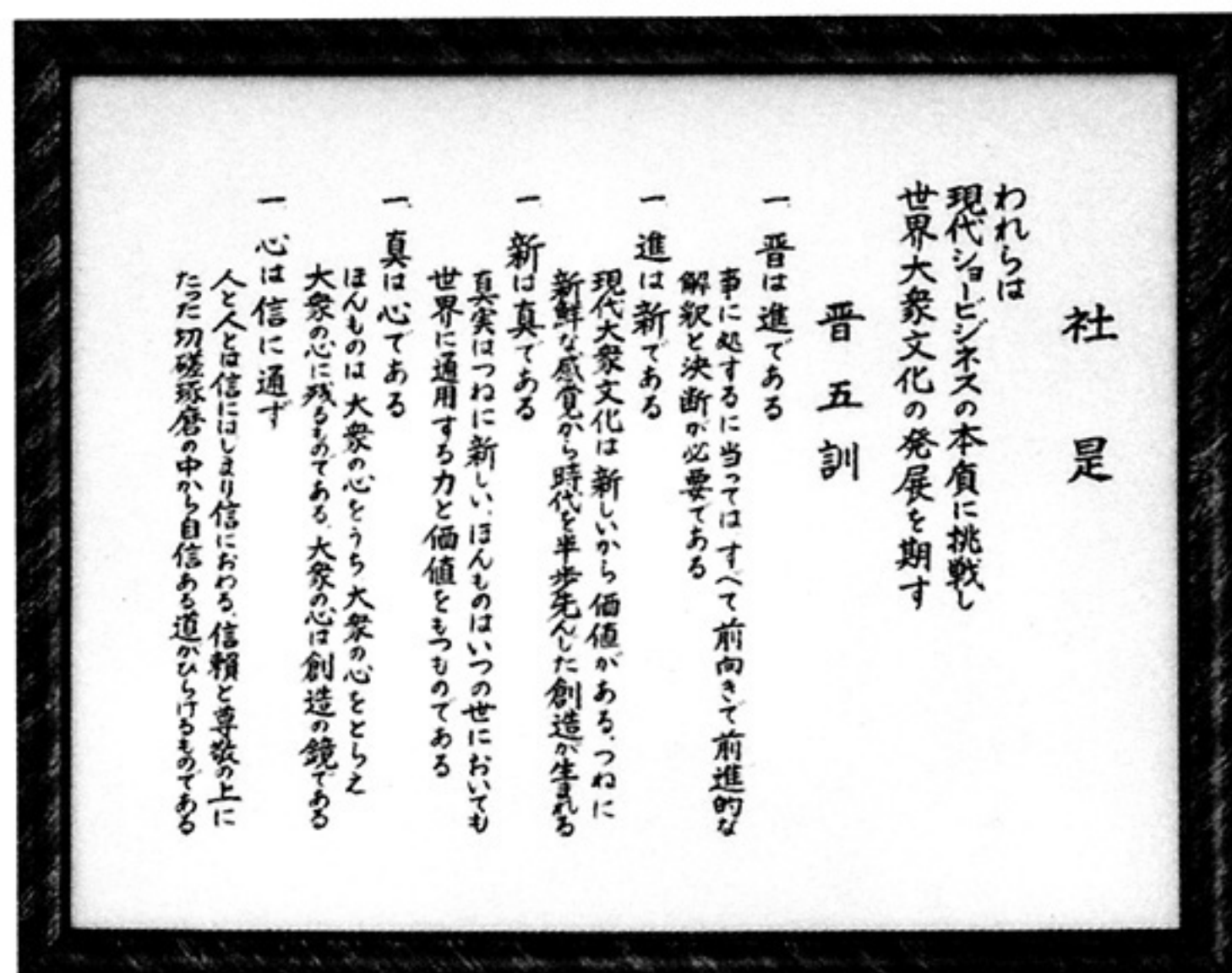
晋五訓

一、晋は進である
事に処するに当っては、すべて前向きで前進的な解釈と決断が必要である

一、進は新である
現代大衆文化は新しいから価値がある。つねに新鮮な感覚から時代を半歩先んじた創造が生まれる

一、新は真である
真実はつねに新しい。ほんものはいつの世においても世界に通用する力と価値をもつものである

一、真は心である
ほんものは大衆の心をうち大衆の心をとらえ大衆の心に残るものである。大衆の心は創造の鏡である



「社是・晋五訓」額

一、心は信に通ず

人と人とは信にはじまり信におわる。信頼と尊敬の上にたった切磋琢磨の中から自信ある道がひらけるものである

晋・進・新・真・心・信……自分の名前「晋」を巧みに配したこの行動規範は、つねに半歩先の時代の要求を取り込み、戦後の大衆文化をリードして、ジャパニーズ・ドリムを追い続けてきた晋と美佐、そして渡辺プロ・グループ社員の大きな心の拠り所であり、指標であり続けてきた。文字にこそなっていないが、ここには「晋は親なり」という晋一人の社長訓が内包されていたのではないか。

この「社は」と「晋五訓」を敷衍して、美佐はこう語る。

「重要なのは、トップを行くのではなく、自然体で、着実に走り抜くことだと思うので。『自然体』と言っても、努力を惜しむものではありません。『自然体』のなかでの切磋琢磨の努力こそが、必ずや、目標に導いてくれるものだからです。妙な自惚れやプライドに囚われることなく、そのことを肝に銘じ、戒めながら、大いなる自信と誇りを持って、目標に向かって欲しいのです。そして、そこで営まれるクリエイティブの権利を明確にして、さらに、その権利を正当に行使できる環境があれば、ショー・ビジネスは二一世紀も大いに成長し続けるでしょう。There is no business like showbusiness」。

ここで記述を、九六年から九七年にかけての美佐の点描に移す。渡辺プロ四〇周年の節目を自然体で、淡々とした足取りで進んでゆくその姿に、渡辺プロの過去と現在と未来が要約されているからである。

美佐の笑顔が、明るく思いっきり弾けた。九六年六月の晴れた日である。栃木のエヴァ

ンタイユ・ゴルフクラブが五月にオープンしたばかりで、美佐は月川蘇豊（ソーホーズ社長）、山崎順一（弁護士）と視察プレーをした。内輪の仲間だったから、同行した加藤征也（当時・総務部次長）もプレーに加わった。

エヴァンタイユとはフランス語で扇の意味だという。この日、グリーンの扇は美佐のボールを煽っていたかのようだった。ラウンドが終わってみると、グロスでアウト五一、イン四八の九九。美佐のゴルフ歴で、はじめて一〇〇を切るスコアが出た。

故・五島昇に手ほどきを受けたくらいで、美佐のゴルフ歴はすでに二〇年を超えている。しかし、渡辺プロ・ゴルフ大会での気配りが逆に、美佐をゴルフから遠ざけていた。テニスのやり過ぎで腱鞘炎を患らい、それからやっとゴルフに戻ってきた。一〇〇すれすれのところまではゆくのだが、なかなか二桁のスコアが出ない。「上達する年頃を無為にすごしてしまったせいね」と悟り顔になるけれど、内心では悟りきれないのがゴルフの業である。

それだけにエヴァンタイユでの成績が嬉しかった。脳裡で五島昇や晋の温顔が、「ついにやったね」と語りかけてくる。ゴルフに凝り出してから、一緒にプレーして回った仲間たちに、「やったわよ」というよろこびの気持ちを伝えたい。そういえば、ずいぶん多くの人から教えられた。「あの人にも、この人にも感謝しなくては、」と美佐は思った。

七月八日、NHKホールで特別番組「躍動！感動！ダンスの世界」の公開録画が行われた。最近のダンス・ブームに乗ったようにみえるが、企画に当たった藤田敏雄の狙いは、ショー・ビジネスの世界でありスポーツを浴びる機会のないダンサーと振付け師を、表面に押し出したいということにあった。日本振付家協会（会長・山田卓）と、渡辺音楽文化フォーラム（理事長・渡辺美佐）が全面的に協力し、宝塚歌劇団、ダグラス・ニエラ



「躍動！感動！ダンスの世界」
（提供/NHK）

ス&グループ（フィリピン）、アンディ・ホイ&グループ（香港）、ジャニーズ・ジュニアがステージ狭しと踊った。

評判になったブロードウェイの『コーラスライン』（マイケル・ベネット）や、『ダンスン』（ボブ・フォッシー）も無名のダンサーに対する賛歌だったが、そのテレビ版をNHKは制作したのである（八月二十五日放送）。美佐はその趣旨に賛同した。ショーをつくる時、大切なロール（役割）を演じるのが振付け師とダンサーだということを、彼女は知っている。「それはいい企画だわ」と一諾し、藤田ともどもNHKの川口幹夫会長と相談するなど、援助を惜しまなかった。前記した香港、フィリピンからのグループは、渡辺音楽文化フォーラムの招聘による。

視聴者からの反響はすばらしかった。「渡辺プロのスターたちが、かつて踊り子さんたちにどれくらい支えられたか。その感謝の気持ちはいまも消えないし、こうした企画が続けられるのなら、私たちも協力します」と、美佐は言う。

九月二十七日、美佐はゴルフ仲間感謝の気持ちを表わす「MINI MISA OPEN」ゴルフコンペを開催した。千葉のザ・プリビレッジ・ゴルフクラブ。タイトルにMINIとあるように、はじめはこぢんまりと、日頃のゴルフ友達やジャズ仲間のフォービート会に声をかけるにとどめようとしたが、話の伝わるのが早く、われもわれもと参加希望者があとをたたない。コンペの招待状に「先日、初めて○○○を切りました（次はいつ出るかわかりません）。世の中いろいろあるにせよ、ともかく元気でいられることに感謝して、これまで私の上手でないゴルフにお付き合い下さいました皆さまと、一緒に楽しくプレーしたいと存じ」とユーモラスに書いている。結局、最終的には一〇〇人を超える盛会となった。女性が多すぎて、女性用ロッカーが足りなくなるというハプニング

グまであった。ゴルフ場支配人が「こんなこと、はじめてですよ」と大汗をかく。八六年から杜絶していた、渡辺プロ杯ゴルフ大会の再現を思わせる雰囲気になった。

美佐は参加者全員に着てもらうTシャツをハワイで発注し、日本に送らせたが、参加者の増加に従って追加オーダーが重なる。全員に行き渡る賞品の選定にも気を配ったが、もつとも苦心したのは美佐賞。電動自転車に、副賞として岩原観光の特選米「みさちゃん」をつけた。そのせいかどうか、第三三位には三人がネット七五・六で並んだが、ルールによってニコルの松田光弘が受賞した。美佐は一〇七を叩いたが、ネットでは盛田良子と伸よく七九・四。ニアピン・ホールでワン・オンできなかった人からは一〇〇〇円を拠出してもらい、フレディー・マキユリーゆかりの「テレンス・ヒギンス・トラスト」国際エイズ基金に寄付するという、いかにも美佐らしい趣向も凝らされていた。

午後三時から二階のボールルームで、芳村真理、八木亜希子（フジ）の司会によるパーティに移ったが、宴も終わり近くなって、美佐を感激させる出来事が起こった。日野皓正、伊東たけしが「ハッピー・バースデー」の曲を奏でながら入場し、ジョージ川口、与田輝雄、世良譲、笈田敏夫がバースデー・ケーキを載せたワゴンを押してきたのだ。二日前の九月二十五日が美佐の誕生日。古いジャズ仲間が美佐に内密で語らい合って、突然の誕生日パーティを演出したのだ。参加者たちは喜んだ。日野と伊東がトランペットとサクスのアドリブを繰りひろげ、会場はさらに盛り上がった。

一二月八日午後一時から、フジテレビの第三四回「新春スターかくし芸大会」の大本番収録が行われた（九七年一月一日放送）。翌年の三月末からフジは、臨海副都心のお台場本社ビルを全面的にオープンする予定であり、すでに一月からドラマ部門、コンピュータ・システム関連が移転していた。バラエティ部門はまだ河田町に残っているが、「か



プレイ中の美佐（右は吉村真理さん）



「MINI MISA OPEN」の誕生日祝い

くし芸大会」は特別に新社屋のV4スタジオを使うことになった。

美佐は、一二時三〇分に到着した。例年なら収録後の表彰とパーティに出席するのだが、この日は違った。居合わせた中村制作室長が新社屋を案内した。スタジオの副調整室にはいると、ゼネラル・プロデューサーの王東順と諸岡義明が笑い合っていた。王はアシスタント・ディレクター時代を含めると「かくし芸」に二五年間も関わってきた。パロディ『七輪の侍』収録のとき、黒澤明の向こうを張って水道のホースから大量の水を降らせたら、地下のリハーサル室が雨漏りして大騒ぎになったことがある。「新社屋なら、もうあんなことは起こらないだろうな」。

その新社屋で、美佐はかえって河田町の旧社屋を思い出し出していた。まだ「新館タワー」がなかった頃の姿である。その旧社屋の狭いスタジオから、「おとなの漫画」や「ザ・ヒット・パレード」が送り出され、渡辺プロの土台が築かれたのであった。今日、悠容と審査員席に座っている植木等が、西軍主将として東軍主将のハナ肇と毒舌の応酬を交わし、「かくし芸」の人気をさらっていた、あのエネルギーが確実に若いタレントに受けつがれているのに美佐は安堵した。

収録後の仕上げパーティで、安室奈美恵が、話し相手もなく端のほうに立っていた。美佐はその安室と一緒に、二階の高みから見える夜の景観を楽しんだ。「それ、とても素敵ですね」とSMAPのひとりが美佐のつけていたブローチを賞めると、「そんなに気に入ったの」と一笑し、美佐はその場でプレゼントした。フジの村上光二常務ともども挨拶に立った美佐は、「出演者の皆様、スタッフの皆様の努力によって、番組がみごとに若返ったことに感激しています」と語った。

一九九七年一月六日、久しぶりにサウンド・シティや岩原観光を含めた、グループ全体

の新年合同朝礼が青山の東京音楽学院で行われた。ここでも美佐は、若返りという視点から挨拶をしている。かねて進めてきたグループ各社の体質改善と、社員の意識改革の成果が徐々に現れてきたと評価したあと、つぎのように課題を指摘した。

「ワタナベ・デジタル・コミュニケーションズは、外部との接点を多く保ちながら、ダブル・ビジョンの発足など、マルチ・メディア対応の新しいビジネスを展開しています。他に先駆けての立ち上がり評価され、注目もされていますが、今年は社員のひとりひとりがグローバル化しているデジタル環境のなかで、どうしてビジネスを取り入れるか、どうしてビジネスにしてゆかかということをテーマにしてほしいと思います。」

先駆けの勝利を信じて、未開の分野に新しいレールを敷いてゆく気概。それが渡辺グループの伝統です。規制緩和によって新しいビジネス・チャンスが生まれるかもしれません。まったく予測できない変化が起こる可能性もあります。変化はつねにビジネス・チャンスを隠し持っています。その変化に素早く対応できる体力づくりと、知力の練磨をつねに心がけましょう。私どもは将来に向けての有益な投資を恐れてはなりません」。

最後に、美佐は「今年は渡邊晋社長が亡くなって一〇年です。井澤社長はじめグループ各社の社長を先頭に、皆様方の努力によって今日、この明るい正月を迎えられたことは大変うれしく、また感謝しております。今日から、これからの一〇年に向かって実りのあるグループをつくって行きましょう」と結んだ。

一月三十一日は、美佐が新年の挨拶のなかで触れたように、晋の一〇回目の命日に当たる。法要としては七回忌のつきは十三回忌になるが、一〇年というひとつの節目で、美佐は「晋を偲ぶ会」を持つようと思立った。当日は、一二時三〇分から自宅に晋とゆかりの深かった方たちをご招待した。順不同で記せば森喜朗、柿澤弘治、牛尾治朗、木滑良久、高



「かくし芸大会」大本番
(提供/フジテレビ)



挨拶する美佐会長



グループ社員たち



絵を贈られる美佐とミキ、万由美姉妹（1993年）



「A Mr. Bass Man」(若き日の渡邊夫妻)
(画/久保幸造)

橋圭三、山口比呂志、大伴昭・芳村真理夫妻、加藤和彦・中丸三千繪夫妻、植木等、谷啓、井澤健、美佐を含めて一四人が故人の思い出に二時間を過ごした。

箱根で知る人ぞ知る蕎麦屋の曉庵に出張してもらった。主人が下見にきて、都市ガスでは火力が弱いからと、当日はプロパンガスを持ち込んだ。「クレイジー・キャッツで酒飲んだメンバーは、いなくなっちゃいましたよ」と植木が言えは、「ゴルフは健康にいいと言うけれど、短いパットは寿命を縮めるね」と牛尾。晋が聞いていたら喜びそうな、ユーモアたっぷりの健康談義だ。

その日の夜は七時から、六本木の中国飯店で晋前社長を偲ぶ「お食事会」が設営されていた。二九日に行われた渡辺プロ役員会のあと、美佐と井澤が話し合っ、急遽、取りまとめた。九三年二月の晋の七回忌のとき、羽佐間重彰（産経新聞社長）や佐藤修（当時・BGMジャパン社長）、折田育造（ポリドール社長）、後藤豊（フォーライフ社長）、堀威夫（ホリプロ会長）、岸部清（第一プロ社長）、村上司（日音会長）、朝妻一郎（フジパシフィック社長）たち、晋夫妻と親しかった四〇名が相語らって、美佐に晋と美佐を描いた五〇号の肖像画を寄贈してくれた。

ジャズを題材にした絵を描きつづけ、国際的にも声価の高い久保幸造画伯に依頼した大作である。戸外にウッドベースを携えた晋が立ち、窓辺から美佐が顔を覗かせている構図には、メルヘンの微風が立ちこめ、若い二人の夢がきらきらと表現されている。その温かい贈物への感謝を含めて、一夕の宴席を持つとしたのである。二日前という慌ただしい招待であったが、三三名が顔を揃えてくれた。寄贈者のほかに吉田正、岩谷時子、平尾昌晃、都倉俊一、川口真の作家も駆けつけた。渡辺サイドからは八名。

会場には晋の遺影と、七回忌に贈られた絵を搬入して飾った。誰からともなく、「はじめに献花しようよ」と声があがって、加藤総務次長が近くの花店に電話する。「白い花を



晋社長を偲ぶ夜のお食事会



晋社長を偲ぶおそばの会

「四一本届けてください」。「二七本しかありません。黄色がまじっちゃいけませんか」「いや、白だけ。知り合いの店から融通してもらったら」。こういう仕切りについてはベテランの先輩たちが集まっているのだから、加藤も必死にならざるを得ない。無事に献花が終わって、吉田正の挨拶のあと杯をあげた。

出席者はいずれも現場の猛者揃い。その大半が渡辺プロの卒業生だ。往年の珍談奇談が披露され、大笑いの渦となる。そうなると渡辺プロ・マネージャーの兄貴分格だった岸部の出番である。「ある日、社に帰ったら若い社員たちが丸く輪を描いて突っ立っている。その輪のなかに美佐さんと、ひと目みてすぐそれとわかるやくざが対峙して、激しく言い合っていた。耳を傾ける間もなく、やくざが美佐さんの頬を引っぱらいた。美佐さんが血相を変えてやくざに飛びかかった。びっくりしたよ」。

あとの話を美佐が引き継ぐ。「あときは社員がみんな尻込みして、一歩退いたものだから私ひとりになったの。相手をしているうちにぶたれた。生まれてはじめてぶたれたわ。かつとして私も向かっていったの。日比谷の交番に訴えようとしたんだけど、みんながそこまですなくても止めたのよ。でも、ほんとうに怒った。親にだって手をあげられたことはなかったから、もう腹が立って、それでやっぱり警察に電話をかけたの」。

晋を親しい仲間たちとともに回想した美佐は、それから半年後、こんどは自分が海外で活動してきた足取りを回顧される立場になった。九六年の暮も近く、MIDEMオーガニゼーションのザヴィエル・ロイ社長は、美佐につきのような打診をしてきた。

「これまであなたがMIDEMに貢献してくれたこと。それがひいては国際音楽産業の発展に顕著な足跡を残すこととなったことに、私はとても深く感銘している。来年（九七年）、香港で行われる第三回MIDEM ASIAの前夜祭がいい機会だと思うので、そ

こで美佐さんを表彰したい。ぜひ受けてほしい」というのである。

MIDEMが二五周年を迎えた年、すでに美佐は大きく貢献したVIP二人のひとりとして表彰されていた。

美佐も最初は、ひとりのアジア人、日本人として世界のなかに出ていった。私のそんな足取りが、ほかのアジア諸国の人びとに、ある種の励ましを与えるかもしれない。美佐はMPAの村上、朝妻両副理事長たちに相談した。彼らは、「ぜひ受けてください。美佐さん個人の問題だけじゃないから」と口を揃えた。

こうして亜州音楽博覧（MIDEM ASIA）の「与MISA WATANABE共進晚餐」の招待状が関係者に発送された。日時は九七年五月二〇日午後九時三〇分、場所はザ・チャイナ・クラブ。旧中国銀行一三樓（階）にある由緒の深い会場である。「請穿着禮服出席」と末尾にあった。

当初に予定された招待客は一〇〇名。八〇名をMIDEMが、二〇名を美佐がリストアップすることにしたが、実際には一二七名に達した。香港日本総領事の上田秀明、国際音楽出版社協会のエド・マーフィ、CASH（香港著作権者団体）会長のマルコメ・バーネット、日本レコード協会会長の高野宏、音楽産業・文化振興財団理事長の松尾修吾、JASRAC評議員会議長の湯川れい子、音楽事業者協会会長の田邊昭知、MPA副理事長の村上司、朝妻一郎など、錚々たる顔触れとなった。

さらに錦上花を添えるように柿澤映子（元外相夫人）、小杉敬子（元文相夫人）、中山晴美（元郵政相夫人）、武藤久子（元総理府長官夫人）が出席を快諾してくれた。

六月一〇日、ロイから美佐表彰の話聞いたフランス政府が、フランス国家として美佐に芸術文化勲章を贈ると申し出た。かねてから音楽を通じて、日本とフランスの親善を図っていた美佐の業績を高く評価していたのである。せっかくの機会だから併せて贈呈した



「与MISA WATANABE共進晚餐」招待状

いという意向だった。こうして香港フランス総領事ダナ・チェリーもリストに加わる。
 ~Ms. MISA WATANABE Tribute Dinner Party~ の主催者は、あくまで M I D E M オールガニゼーションである。ヨーロッパやアメリカで行われるパーティの例に洩れず、美佐をおおいに顕彰するスピーチと授賞があり、美佐の受賞スピーチがつづくというシンプルなシナリオであった。

ウエルカムドリンク・ルームには、美佐の活動軌跡を写真で追ったボードが飾られ、パーティのはじめに放映するスペシャル・ビデオが制作されることになった。M I D E M からビデオの制作を頼まれた渡辺のスタッフは、サミュエル・ウルマンの詩「青春」をエピソードに置き、美佐の国境を超えたエネルギーシユな足跡をまとめた。美佐のプロフィール紹介でありながら、同時に若い世代に対する美佐のショー・ビジネスへの招待でもあった。

次第に高まるムードに押されて、美佐は在パリの親友で著名なファッション・デザイナーのジュンコ・シマダに、パーティ・ドレスを発注した。シマダはアジア的な雰囲気を感じ、モダンとエレガンスをみごとに融和させたドレスをデザインした。それが美佐の手許に届いたのは一九日の午前。そして午後にはもう香港に飛び立った。

パーティは予定どおり、六月二〇日午後九時三〇分にスタートした。アグネス・チャンが司会を引き受けた。「私が日本で歌手デビューしてから、今年はずいぶん二五年になります。私を日本の芸能界で育ててくれた『日本のママ』が美佐さんでした。その美佐さんが M I D E M への貢献を讃えられて、私の故郷である香港で表彰されます。こんな素敵なことがあるでしょうか」と、アグネスが一気にパーティの核心へと誘う。

七分三〇秒のスペシャル・ビデオが描き出す美佐の姿に、参加者がそれぞれの青春を重ねて、会場の空気がにわか濃密さを増す。放映終了後の暗闇にピンスポットが走ると、

そこに美佐が登場してきた。さかんな拍手と歓声。フォーマルな装いの出席者のなかで、美佐のはにかんだような微笑と絢爛たるドレスが、アットホームな焦点をつくり出した。

ザヴィエル・ロイの顕彰スピーチは熱のこもったものであった。無理もない。彼はベルナル・シェプリにつぐ二代目の M I D E M オールガニゼーションの社長で、M I D E M との関わりは美佐のほうが長いのである。その経験からくる貴重なアドバイスに力づけられたこともある。スピーチのあと、彼が美佐に手渡したのはジャン・コクトーの「友情」をモチーフにした、バカラ社特製のクリスタル・トロフィーだった。バカラ社は一七六四年、ルイ一五世の勅許にはじまるフランス最高級ガラス工芸店。ルーブル美術館がバカラ二〇〇年の歴史を讃える祝典を開催したほどの名舗である。この選択にもロイの周到な配慮が窺われた。

ついでダナ・チェリー総領事がフランス政府を代表して、日仏親善に久しく尽力した美佐の業績を語った。長身を少しかがめるようにして、美佐の胸に手ずから芸術文化勲章 (Chevalier des Arts et des Lettres) を飾った。アジアでは最初の受賞となった。

進行はすべて英語である。元外務大臣の柿澤弘治氏も所用を終えて駆けつけてくれ、ユーモアを交じえたスピーチを行って会場を盛りあげた。感謝する美佐のスピーチも英語で行われた。フレーズの中に真率な表情で会釈をおくり、一抹の含羞が言葉に温かみを滲ませる。「初々しいという言葉の意味がはじめてわかったよ」と、大里洋吉 (アミューズ会長) は舌を巻いた。

谷村新司とアラン・タムが壇上に上がって花束を贈呈したあと、美佐をなかに挟んで、晋が好んでいた「ユー・アー・マイ・サンシャイン」を歌った。後半は出席者たちも歌に加わって感動的な一幕となった。はじめは谷村にギターをという話もあったが、谷村は「タキシードにギターは合わない。アカペラでいこうよ」と言った。そのアカペラが全員



盛り上がる会場



勲章「シュバリエ」授与 (右・チェリー総領事)



トロフィーと共に (右・ザヴィエル・ロイ社長)



晋社長の遺影の前で
(提供/月刊「太陽」 撮影/ケイ オガタ)

を巻き込む効果をあげた。

出席者のひとり、オリジナル・コンフィデンス社長の小池聰行は、「あたたかい空気に包まれた最高のパーティ。国際的な儀礼性と家族的な親密性をふたつながらに実感した」と印象を語っている。

美佐は出席者たちに、記念品としてバカラ社のクリスタル時計を贈った。自らが受けたトロフィーの歓びを、同じバカラ社の品で頒ち持つてほしかったのである。同時に、この時計は四一日後の香港返還ではじまる一国二制度という中国の壮大な実験と、これに深く関わって展開されるだろう新しいアジアのミュージック・ビジネスの日々にも時を刻んでゆく、という思いもこめられていた。

つづくMIDEM ASIAに出席した美佐は、二三日の夕刻に帰宅した。まず、晋にこんどの受賞パーティが無事に終わったことを報告しなければならない。出席者たちが晋の記憶を抱いて、「ユー・アー・マイ・サンシャイン」を歌ってくれたことも。

美佐はしみじみと晋の遺影を眺めた。温容という言葉がぴたりと当てはまる風貌だが、その内面に広く、長く、深く、しかも鋭い洞察力を秘めていた。晋の卓越したリーダーシップを抜きにして、現在の渡辺プロを語ることはできない。静かな感謝の気持ちに美佐は包まれた。



「ユー・アー・マイ・サンシャイン」

補述とあとがき

本書の刊行を目的とした「社史編纂委員会」がスタートしたのは一九九三（平成五）年五月二〇日。九六年五月に第一稿が検討に付され、追加を含めた改訂稿が九七年一二月に脱稿した。さらに諸種の照合、整合、推敲を加えて、決定稿が完成を見たのは九八年一月であった。

渡邊晋・美佐夫妻の渡辺プロダクション創立は一九五七（昭和三二）年六月であるが、本書では設立以前に遡って、渡辺プロが成立するに至る時代的・音楽的環境にも触れた。その環境のなから、渡辺プロの歴史を底流する最初の夢が生まれた。夢の形はさまざまに変遷したが、夢を抱きつづけ、夢に行動を触発されるという渡辺プロの特質は、ついに変わることがなかった。

本文の記述は、一九九七（平成九）年六月で止めている。当初の編纂目的だった「四〇年史」に添ったわけであるが、夢の持続と変化Ⅱ新生というテーマからみると、その後の経過のなかにも、いくつかの補述が必要な事績がある。

特筆されるのは、フレッシュな所属タレント群のめざましい台頭である。なかでもお笑い系のなからネプチューン、ふかわりょうが先ず頭角を現して、渡辺プロが確保している約七〇組をリードしている。過去十年余にわたって、毎月、ライブ活動を継続してきた成果が実ったのである（現在は東京・原宿のクレセントホールと青山の草月会館を主要な拠点にしている）。

そのライブ・パフォーマンスをもとに九七年三月にふかわりょう、一〇月にネプチューンのビデオを発売した。ともに初回は二〇〇〇本。ところが数カ月のうちにふかわは二万本、ネプチューンは三万本を売り上げた。この実績が九八年五月のビデオレーベル「渡辺笑会」立上げにつながる。渡辺プロとワタナベ・デジタル・メディア・コミュニケーションズの共同事業で、企画・発売はワタナベ・デジタル、販売はポニーキャニオンが担当する。

かつてビデオは、映画やテレビ番組の二次使用という概念があつたが、渡辺笑会の発想はこれと対極にある。若いユーザーに向けた新しいオリジナル・メディアとして、彼らの活躍が情報化し、ビデオ発↓既成メディア着という逆流現象を生んだ。

歌や演技のアーティストたちも着実に成長し、かつ陣容も強化されつつある。ロックのThe KIX・S（ドリーミックス所属）、TRICERATOPS（トライセラトプス／マニア・マニア所属）、女優の原千晶（ビスケット・エンターテイメント所属）、木村佳乃（トップコート所属）はスター化し、渡辺プロは九七年にカムバックした奥村チヨが復帰、高見恭子、飯島愛の入社などがつづいている。

九八年四月、渡辺プロは渡辺ミキ副社長が管轄する第二制作本部を新設し、松本明子、中山秀征、マルシア、吉田栄作らに前記お笑い系を掌握。事務所も表参道の中心部（千代田ビル）に移した。将来に向けた、より特異な戦略的対応を要求されるのが、第二制作本部の特色といえるだろう。

それは、つぎのようなミキの発言によっても裏づけられる。

「芸能界も多少の時差がありながら、ビッグバンが来ているのではないかと思

います。要するにシステム自体の改革ですよ、そういうことが無視できなくなってきた時代になっているんじゃないかと思えます。(父の渡邊晋が亡くなったあと、母・美佐を助けてこの仕事に入って) 実感したのは、やはり渡辺プロダクションはそのままの形で継承はできないと。私およびいま残っている社員、往年の渡辺プロを知らない新しい社員も含めて、新しい会社を創業できたというような力を得られたならば、そこではじめて、なんとなく世のなかの方々から「あ、渡辺プロはやっているね」というふうに見えていただけじゃないかと」。

(月刊「連合通信」平成一〇年六月一五日号、巻頭インタビューより)

第九章第二節の記述に、これらの新しい動向を繋いでみると、この一二年間の渡辺プロ・グループ史の位相が読めてくる。それは歴史としての第一期と第二期の継ぎ目であり、さらに言えば、若い世代の発想と行動による第二期の力強い助走期間だったということである。

渡邊美佐は、九八年六月の音楽出版社協会(MPA)の役員改選において会長に三選(同年から理事長を会長と改称)された。つづく日本音楽著作権協会(JASRAC)の評議員選挙でもトップ当選を果たしたが、理事への就任は辞退した。古賀ビル問題で足踏みした同協会正常化への道筋は、ほぼ見えていた。これからは、著作権整備の諸活動に側面から手を貸しつつ、業界に新しいエンターテインメント創造の力が生まれてくることを、より自由な立場で夢見たいと思うからだ。

さて、「あとがき」として触れなければならないことがある。

プロダクション活動を彩る華は、いうまでもなくタレント、もしくはアーティスト諸氏の豊潤で多様な活躍であろう。とくに渡辺プロダクションの輝かしい実績

は、きわめて質の高いタレント陣のパフォーマンスを抜きにしては考えられない。それを物語る刊行物や記事の類は枚挙にいとまがない。

いっぽう、本書は渡辺プロダクション・グループの企業活動を、そのときどきの時代や芸能事情との関連のなから浮き彫りにすることを意図した。日本のプロダクションは欧米の、例えばウィリアム・モリス(アメリカ)に代表されるようなタレント・エージェンシーとは異なって、制作を含む多角的な経営活動を行うビジネス空間が確保されている。渡辺プロの歴史は、その可能性の追求と実現の過程だった。

しかし、この多様な経営活動のあいづく展開は、これまで客観的に記録されることがなかった。ここで日本、いや世界でも稀有な芸能プロダクションの全体像が企業史として作成されていないのではないか。これが『渡辺プロ・グループ四〇年史』の発意となった。

タレント諸氏の鮮やかな活躍が、企業展開の節目を象徴するものを例外として、きわめて少なくしか記載されていないのは、以上のような本書の性格によるもので、この点は編集委員会がもつとも苦慮し、かつご諒恕を得たいと願っているところである。

プロダクションという企業には、商品素材としてのマテリアルは存在しないし、ベルトコンベアに乗せてつくり、市場に送り出す商品もない。あるのはただ、タレント諸氏とスタッフが共有する夢だけである。

夢は逃げ足が速い。それをしっかりと抱きしめてビジョンに孵化させ、実現に漕ぎつけるには、絶えざる創意工夫と執拗なほどのエネルギーが必要だ。それだけに夢がビジネスになったときの歓びは大きい。

夢がビジネスになるといふこと。プロダクションは夢の工房なのだ。
 渡辺プロダクションという夢の工房には、夢をビジネスに導く、じつに多くの
 ケース・スタディが蓄積されている。本書はその集成でもある。本書が契機とな
 り、ここからさらに豊かな夢の数々が紡ぎ出されるとしたら、われわれの喜びは
 これに過ぎるものはない。

「渡辺プロ・グループ四〇年史」編纂委員会

委員 植木等

加藤征也

河合聰一郎

白石八三郎

谷啓

中島二千六

渡辺万由美

渡辺ミキ

執筆 河端茂

事務局 鈴木典之

参考文献

題名

著者名

発行年

出版社

わかっちゃいるけど…シャボン玉の頃	青島幸男	一九八八年	文藝春秋社
ジャズと生きる	穂吉敏子	一九九六年	岩波書店
夢を食った男たち	阿久悠	一九九四年	毎日新聞社
戦後芸能史物語	朝日新聞学芸部編	一九八七年	朝日新聞社
音楽界の実力派	安倍寧	一九六五年	音楽之友社
ショウ・ビジネスに恋して	安倍寧	一九九六年	角川書店
三島由紀夫日録	安藤武	一九六四年	未知谷
拍手のなかに	伊藤邦輔	一九八三年	毎日新聞社
夢を食いつづけた男	植木等	一九八四年	朝日新聞社
植木等のみなさんおそろいで	植木等デラックス対談	一九九二年	ファンハウス/扶桑社
日本のジャズ史 戦前戦後	内田晃一	一九七六年	スイングジャーナル社
夢のワルツ	内野二郎	一九七四年	講談社
社長、出番です。	音楽協マスコミ広報委員会編	一九九五年	日本音楽事業者協会
ナベプロ帝国の興亡	軍司貞則	一九九二年	文藝春秋社
植木等と藤山寛美	小林信彦	一九九二年	新潮社
シャボン玉ホリデー	五歩一勇	一九九五年	日本テレビ放送網
東宝行進曲	斉藤忠夫	一九八七年	平凡社
フレディー・マキキュリーと私	ジム・ハットン(島田陽子訳)	一九九四年	ロッキング・オン
歌謡曲ベスト1000の研究	鈴木明	一九八一年	TBSブリタニカ
タレント帝国/芸能プロの内幕	竹中芳	一九六八年	現代書房
呼び屋	竹中芳・ひよしうしお・河端茂	一九六六年	弘文堂
映画 夢を語れたとき	田波靖男	一九九七年	広美出版事業部
7人のネコとトロンボーン	谷啓	一九九五年	読売新聞社

- | | | | |
|----------------------|------------------------|-------|-------------|
| メディア・ウォーズ | 田原総一郎 | 一九九〇年 | 講談社 |
| どんだんクジラの笑劇人生 | 塚田茂 | 一九九一年 | 河出書房新社 |
| 戦後風俗史 | 戸川猪佐武 | 一九六〇年 | 雪華社 |
| アトランティック・レコード物語 | ドロシー・ウエイド他(林田ひめじ訳) | 一九九二年 | 早川書房 |
| 日本の喜劇人 | 中原弓彦(小林信彦) | 一九七二年 | 晶文社 |
| 日本音楽著作権史 | 日本音楽著作権協会編 | 一九九〇年 | 日本音楽著作権協会 |
| 日本レコード協会50年史 | 50周年委員会年史編纂ワーキング・グループ編 | 一九九三年 | 日本レコード協会 |
| モータウン・ミュージック | ネルソン・ジョージ(林はじめ訳) | 一九八七年 | 早川書房 |
| ヒット・マン | フレドリック・ダネン(吉田利子訳) | 一九九一年 | 角川書店 |
| モータウン、わが愛と夢 | ベリー・ゴードイ(吉岡正晴訳) | 一九九六年 | TOKYO FM出版 |
| 恋の都 | 三島由紀夫 | 一九五四年 | 新潮社 |
| サウンド解剖学 | 宮川泰 | 一九八一年 | 中央公論社 |
| 日本のポピュラー史を語る | 村田久夫・小島智 | 一九九一年 | シンコー・ミュージック |
| テレビ番組の40年 | 読売新聞芸能部編 | 一九九四年 | NHK出版 |
| 渡邊晋追想録 | 渡邊晋追想録編集委員会 | 一九九〇年 | 渡邊晋追想録刊行会 |
| ビギン・ザ・ビギン | 和田誠 | 一九八二年 | 文藝春秋社 |
| もう、きみには頼まない―石坂泰三の世界― | 城山三郎 | 一九九五年 | 毎日新聞社 |
| 元祖テレビ屋大奮戦 | 井原忠高 | 一九八八年 | 文藝春秋社 |

抱えきれない夢―渡辺プログループ四〇年史―

一九九九年一月三十一日発行

発行 財団法人 渡辺音楽文化フォーラム

理事長 渡邊美佐

東京都港区麻布台一丁目八番一〇号 偕成ビル

編集 財団法人 渡辺音楽文化フォーラム

「渡辺プロ・グループ四〇年史」編集委員会

装丁 和田 誠

制作協力 大日本印刷株式会社 C&I 年史センター

株式会社 フューチャー・タスク・ベース

印刷製本 大日本印刷株式会社

東京都新宿区榎町七番地

©WATANABE FOUNDATION FOR MUSIC & CULTURE
All rights reserved.